

三上社長にきいてみた。

シリーズ「まちづくり考」その6 ～ 一張一弛 ～

「まちづくり考」待望の第6弾！！

このシリーズは、三上社長のまちづくりへの考えを様々な観点から聞いていくコーナーです。

はじめに

江戸時代、天保年間(1830年-1843年)には諸藩で藩政改革が行われたが、水戸藩での藩政改革の中で、第九代藩主徳川斉昭公は弘道館(天保十二年/42歳)と偕楽園(天保十三年/43歳)を開設した。

1.弘道館

弘道館は、当時の藩校としては国内最大規模である。

正庁の軒下に掲げられている扁額「藝於游(芸に遊ぶ)」は「六芸(りくげい)に悠々楽しみながら勉強する」という意味。六芸とは、礼(礼儀作法)、楽(音楽)、射(弓術)、御(馬術)、書(習字)、数(算術)などの学問武芸のこと。



2.偕楽園

偕楽園は、金沢の兼六園、岡山の後樂園とともに日本三名園である。

偕楽は「偕(ともに)楽しむ」という意味。創設の理念を記した『偕楽園記』にある「一張一弛(いっちょういっし)」は「厳しいだけではなく、時には弛めて楽しませることも大切だ」という教え。

文武修行の場である弘道館(張)と、心身を休める場である偕楽園(弛)は、一張一弛の思想の元、相互に補完しあう、対をなす教育施設としてつくられた。



3.一張一弛

第二代藩主光圀公は、歴史書「大日本史」の編纂所としての彰考館を江戸と水戸に創設し、全国から優れた学者を招いた。働きづめでは逆に効率が下がると考え、彰考館では年末年始の休みや定休日もあった。勤務中に食事を支給し、休憩時間にお茶やお菓子、時には酒も出された。帰宅前に入浴することも出来た。このような考えが斉昭公にも受け継がれ、人材育成には、弓を張ったり弛めたりする一張一弛になぞらえ、緊張とリラックスのバランスが大切であると考えた。

一張一弛の精神は偕楽園の構成にも反映されている。斉昭公は陰陽の調和に重きを置き、表門から入ると、まずは竹林や杉林で構成される幽遠閑寂な「陰」の空間が広がる。この「陰」の空間を抜け、吐玉泉経由で「陽」の場である梅園へ抜けることで、梅園の華やかさがより鮮明に引き立つ。

4.弘道オフィスと偕楽ラウンジ

60周年記念事業で整備された2階の「偕楽ラウンジ」は、1階の執務室「弘道オフィス」とは一張一弛の対をなす。弘道オフィスでは緊張感をもって仕事に取り組み、陰と陽で空間が構成される偕楽ラウンジでほっと一息。

欧米の考え方は二元論と言って、善か悪か、敵か味方か、白黒はっきりさせることに特徴があるが、日本の伝統的な考え方は一元論。一張一弛。文武両道。陰と陽。デジタルとアナログ。ハイテクとハイタッチ。仕事と家庭。どちらかに極端に振れるのではなく、その両方をいい塩梅に、いいとこ取りすることで、良い結果に繋げる。

5.まちづくりのあり様

私たちの働き方、日常の暮らし方だけではなく、まちづくりの分野でも、一元論に立ったバランスを考慮した「いいとこ取り」が大切だ。デジタルで出来ることは徹底的にデジタル化し、その上で本物をリアルに体験する。飲食店はもちろん、物販店でも、またお祭りやイベントでも、このハイブリッド化がポイントだ。

私たちが「弘道オフィス」と「偕楽ラウンジ」をハイブリッドに活用することで、これからのまちづくりを実現することが可能となるのでは。そしてそれが、「まち」も「ひと」も輝く明日へ繋がる、と信じている。